

大学生の夢と自我同一性地位との関係

本田時雄・阿部 亘

The Relation between Dream and Ego Identity status

Tokio Honda and Wataru Abe

<緒言>

夢というものは一体何であろうか。夢とは、甘く儂い現実離れしたもので、必ず消えてゆくものなのであろうか。

夢が夢として人を支えることがある。また、夢を現実のものに近づける、夢の実現のために努力する人がある。そんな時、夢はその人を前へ前へと駆り立てる原動力となる。こう考えてみても、果たして夢とは子どもじみた、甘く儂いものなのであろうか。

翻って、現代は夢を持たない時代だという。しかし、現代社会では、少なくとも日本では、生まれた家柄によって一生が決まってしまうようなことはほとんどない。また、近代化が進み、豊かになった社会では、肉体的には大人でありながら生産活動に従事しない学生が増え（高学歴化）、生き方を模索する、言い換えれば生きる方向性が定まっていない青年期の期間が長くなる傾向にある。そんな時に自分なりの夢を見つけ、それに向かって努力することは、生きる上で大きな力になるのではないだろうか。

それなのに、なぜ今の時代は夢が持てない時代だというのだろうか。様々な原因が考えられるが、そのひとつには、過度の高学歴志向、それに伴い加熱する受験戦争があるのではないだろうか。「いい学校に入る＝いい会社に入る＝幸せな人生が約束される」と親や先生から言われ続け、いい学校に入ることに全てを賭けてきた子ども達。或いはそこまではいかなくとも、「大学に行くのは当たり前」「今までの教育の延長上」と捉えて進学をした学生が大部分ではないだろうか。

しかし、実際に入学してみればどうであろうか。今までの受験と同じ感覚で就職や進学を目指す学生も一部にはいるだろうが、多くは自分の生き方を主体的に選択するという初体験のことに戸惑うのではないだろうか。そんな時、夢の見方を教わず、目の前の受験という目標を押し付けられてきた学生は、どんな夢を見るのだろうか。自分を後押ししてくれる訳でもない、妄想に近いような夢を見るのだろうか。それとも、夢なんてくだらない、と切り捨ててしまうのだろうか。

また、子どもの頃から夢を持ち続けてきた人も、社会に出るといって人生の選択を迫られる時にどんな対処をするのであろうか。実現しそうでったり、今後も持ち続けられそうな夢ならいいが、捨てることを考えなければならぬような事態に追い込まれた場合、どのようにして自分を納得させ、また現実との折り合いをつけるのだろうか。

こうして幾つかの選択肢の中から一つを選び、主体的に自らの生き方を決定することを、エリクソン (Erikson, E. H. 1959) は「アイデンティティの形成」と呼んだ。

以上のようなことから、現代青年の夢とアイデンティティの形成には関係があるのではないか、ということを実験紙法を用いて調査し、青年期の問題として考察することが、本研究のねらいである。

1. <夢とは>

夢とは何であるか。この問いかけが今回の研究の根幹を成すものである。そこで実際に辞書(時枝・吉田, 1983)で調べてみると、①睡眠中に現実と同じように種々の出来事を見聞きすると感ずる現象。多く視覚的な性質を帯びるが、聴覚、味覚、運動感覚に関係する。②現実離れた考え方。実現しそうな望み。③将来は実現させたい理想。④はかないさま。頼りにならないさま。または、ぼんやりしたさまのたとえに用いる。⑤仏教で、この世の迷いのたとえ。煩惱。心の迷い。⑥〔後に打ち消しの語を伴って「夢にも」の形で〕まったく。少しも。決して。①の定義は他の定義とは明らかに区別されるが、それ以外は③を除き、「はかないもの、心の迷い」とでも言うべきものである。

また、同じ辞書から「夢を見る」という用例を拾ってみると、「実現しそうな空想的な希望を持つ。また、将来実現させたい願いや理想を抱く」とある。どうもその人を支える、後押しするものというよりも、いつまでもそんなことにこだわってはいられない、「夢にも」(決して)実現しないもの、といったニュアンスのようだ。

さて、今回の研究ではこの「夢」というものを若者達がどう考えているかを調べたものだが、今まで述べてきたような定義以外に夢というものの性格を考えることはできないだろうか。

2. <人間らしい生き方>

فرانクル (Frankl, V. E. 1957) は、現代に生きる人間が実存的空虚からくるノイローゼに悩まされており、これは価値実現の手段に囚われ、最終目標である価値そのものを忘れてしまっているという真の生きがいの無さからくるものであると指摘した。また、フロム (Fromm, E. 1976) は、産業革命以来、技術が人間を万能にし、科学が全知にし、自然の支配を可能にし、物質的に豊かになり、最大多数の最大幸福が達成され、個人の自由が約束されるという、人間の希望と信念を支えてきた「限りなき進歩の大いなる約束」が幻想にすぎないことを知ったことによって、「人間として生きる」ための新たな決断に迫られていることを指摘している。両者とも、現代社会に於いて人間の疎外が進行し、人間が人間らしく生きることが困難になってきているゆえに、人間としての生き方を問い直し、真に生きがいのある生き方を求める必要性を主張している。

更にフランクルは、「人生の意味を求めて苦闘すること、人生に意味があるかという疑問に取り組むことは、それ自体では病理現象ではない。青年に関していえば、人生に意味があるということに当然のこととせず、敢えてそれに挑戦することが、彼等の特権なのである」「実存的絶望を恥じる必要は一切無い。なぜならば、それは神経症的兆候ではなくて、人格的成熟の達成だからである。なканずく、それは知的誠実さと正直さの表れなのである」と述べ、存在の意味を問うという契機こそ、人間と他の動物を分ける本質的相違であること、そしてそれが青年期に生じ易いことを指摘した。青年が自己のアイデンティティ形成に真剣に取り組めば取り組むほど、この問いを問わざるをえない。しかし、この問いは自己の生きる基盤、存在を根底から揺さぶる恐れがあるため、多くの場合、生存の意義を問う問いが意識の中に上がってこないよう無意識のうちに防衛が働き、気晴らしの中に逃避することがある。

後で触れるアイデンティティの拡散の状態に、時間的展望の拡散、勤勉性の拡散がある。前者はありもしない時間の余裕を見たり、また逆に、自分はもう若くない、と絶望してしまったりすることを指す。後者は、本来やるべきことを避けようとして、他のことに没頭してしまうことなどを言う。このような状態の時に見る夢を、「決して実現することのない、現実離れした空想」と言うのかもしれない。

3. <自我同一性>

自我同一性とはエリクソンが提唱した、Ego Identityの邦訳である。アイデンティティという語は既に日常にもよく使われ、一般には「自分とは何か」に対する答えであると理解されているが、ここではもう少し詳しくみてみることにする。

この概念は主観的意識体験を重視したものであり、エリクソンは「自我同一性の感覚」と表現している。この感覚とは「内的な普遍性と連続性を維持する各個人の能力が、他者に対する自己の意味の普遍性と連続性とに合致する経験から生まれた自信のこと」と定義されている。

この定義の中で重要な点が三つある。まず最初は内的な普遍性と連続性ということである。これはつまり、自己の生育史から一貫した自分らしさ、自分は何者でもない自分である、そしてその自分は過去から現在そして将来も不変であるということである。

第二に、そういった自己が他者によっても認められているということである。自分が理解している自分の姿が社会の中でも同じように認められ、位置付けられているということなのである。

そして最後に重要なことは、自我同一性が感覚であるということである。以上の二点が、頭で理解されているのではなく、自己確信として感じられ、意識されているのである。エリクソンによれば、これは「身体がくつろいでいる感じ」「自分がどこへ行こうとしているのかわかっている感覚」であるという。

この自我同一性の感覚が自分の中にできあがっている時、これを自我同一性の形成と呼ぶ。

さて、エリクソンは自我同一性の形成を彼の漸成発達理論に於いて、青年期の発達課題として捉えた。青年期は人生の中でも、最も自分について悩み、将来について考える発達段階であると言える。エリクソンは青年期を「それまでの様々な経験の中から見つけ出してきた自分というものを統合する年代」と考えたのである。しかし、青年期に統合された自我同一性もその後変化しないという訳ではない。様々な人生経験を積み重ね、その後の発達の中で修正されながらいつそう強固なものになっていくのである。

一方で、青年期に於いて統合がうまくいかなかった場合、自我同一性の拡散に陥ると言われている。これは「自分が何であるかわからなくなってしまった」「自分がばらばらに感じられる」などの状況である。この同一性拡散 (Identity Diffusion) の状態に陥ると、その程度によっては日常生活に支障をきたすような症状となって現れることもある。

同一性の拡散ではないものの、まだ自我同一性が形成されていない段階をモラトリアム (Moratorium) と言う。これは元々は経済用語で「猶予期間」という意味である。人間は自由に使える時間の多い青年期にさまざまな経験をし、その経験を通して、自分自身のことを考え、将来に思いを巡らせ、人生を価値あるものとしていくことができるのである。エリクソンは青年期を社会的な義務や責任を最小限にして、この時期の最重要課題である自我同一性の形成のためにそうしたさまざまな経験をすることを社会から容認され、猶予された期間としてモラトリアムと称したのである。

自我同一性地位

今回用いた質問紙には、自我同一性地位を測定する質問が含まれていた。自我同一性地位とはマーシャ (Marcia, J. E. 1966) によって考えられたものであり、自我同一性がどの程度形成されているかを幾つかの段階で示したものである。マーシャによれば、自我同一性の有り様は「危機」(Crisis) と「傾倒」(Commitment) によって決まるといふ。ここで言う「危機」とは、自分にとって意味のある幾つかの可能性の中からひとつを選ぼうと悩み、意思決定を行うことを指す。また、「傾倒」とは選んだものに対して積極的に関わろうとする姿勢のことである。この両者を経験しているか否かで自我同一性地位が決まると考えたマーシャは、職業と思想におけるそれを表1のような段階に分けた。

表1 マーシャの同一性地位

自我同一性地位	危機	傾倒
同一性達成 (Identity Achiever)	経験した	している
早期完了 (Foreclosure)	経験していない	している
モラトリアム (Moratorium)	その最中	しようとしている
同一性拡散 (Identity Diffusion)：危機前拡散	経験していない	していない
同一性拡散：危機後拡散	経験した	していない

ここでそれぞれの自我同一性地位の概要を説明しておく。

- ①同一性達成：既に幾つかの選択肢の中から自分自身で考えた末、意志決定を行い、それに基づいて行動している。適応的であり、自己決定力、自己志向性がある。環境の変化に対しても柔軟に対応でき、対人関係も安定している。
- ②早期完了：選択肢の中で悩んだり疑問を感じたりすることがそれ程なく、職業や生き方が既に決定されている。親の考え方と強い不協和はない。「硬さ」が特徴であり、一見同一性達成と同じように見えるが、この型は環境の急激な変化などのストレス下で柔軟な対応が困難となる。
- ③モラトリアム：現在、幾つかの選択肢の中で悩んでいるが、その解決に向けて努力している。決定的な意志決定がまだできないために、行動に曖昧さが見られる。
- ④同一性拡散
 - － (1) 危機前拡散：過去に自分が何者であったか曖昧であるために、現在や将来の自分を想像することが困難である。自己選択に於ける積極的な関与が見られない。
 - － (2) 危機後拡散：「積極的に関与しないことに積極的に関与している」タイプである。全てのことが可能だし、可能なままにしておかねばならないという特徴を持つ。そのため、確固とした自己を決定することができず、「あれもこれも」というまとまりの無い状態になる場合もある。

また、本研究で用いた自我同一性尺度 (表2、加藤、1983) によって測定された自我同一性地位は、表3のように6段階に分けられる。これはマーシャによる傾倒 (自己投入) の程度を現在と将来の希求に分け、それと過去の危機により分類したものである。

表2 自我同一性測定尺度

1. 私は今、自分の目標をなしとげるために努力している
2. 私には、特にうちこむものはない
3. 私は、自分がどんな人間で何を望み、行おうとしているのかを知っている
4. 私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージをもっていない
5. 私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない
6. 私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということをおつて真剣に迷い考えたことがある
7. 私は、親や周りの人間の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない
8. 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある
9. 私は、一生懸命にうちこめるものを積極的に探し求めている
10. 私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない
11. 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている
12. 私には、自分がこの人生で何か意味ある事ができるとは思えない

表3 同一性地位

同一性地位	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求
同一性達成	かなりあり	かなりあり	問わない
A-F中間	かなりあり	ある程度あり	問わない
権威受容	かなりあり	乏しい或いはない	問わない
積極的モラトリアム	ある程度あり	問わない	かなりあり
D-M中間	積極的モラトリアムにも同一性拡散にも当てはまらないもの		
同一性拡散	かなり乏しい	問わない	かなり乏しい

本調査

I 目的

現代の青年が夢をどのように捉えているのかを質問紙を用いて調査する。そして、その概念を規定している要因を因子分析によって探索する。

II 方法

・調査期間、場所、対象者

1996年10月28日～12月9日。文教大学構内に於いて、授業時間等に配布。文教大学の教育学部34人、人間科学部35人、文学部27人の1～4年生。男子27人、女子68人。1年生31人、2年生37人、3年生10人、4年生17人の合計96人であった（性別・学年不明各1名）。

・質問紙

回答は「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの6段階尺度とし、当てはまる数値に×印をつけてもらった。

III 結果および考察

回答について、「まったくそのとおりだ」を6点、「全然そうではない」を1点とし、中間段階を

表4 各項目の平均値、標準偏差、回答者数(=N)

項目番号	平均値	標準偏差	N	項目番号	平均値	標準偏差	N
1	3.156	1.431	96	12	5.146	1.151	96
2	3.563	1.272	96	13	5.000	1.161	95
3	1.937	0.965	95	14	1.442	0.817	95
4	2.844	1.028	96	15	4.552	1.105	96
5	1.521	0.882	96	16	1.621	0.784	95
6	3.323	1.476	96	17	5.542	0.648	96
7	2.875	1.259	96	18	2.448	1.213	96
8	2.116	1.178	95	19	4.552	1.025	96
9	3.104	1.518	96	20	2.188	1.029	96
10	3.011	1.227	95	21	2.281	1.271	96
11	4.421	0.947	95				

6件法で得点化した。表4と図1に各項目の平均と標準偏差を記す。一部の項目に標準偏差の偏り、またデータ分布の歪みが見られたが、それらの項目に重要な因子を割り出す情報がある可能性も否定できないため、敢えて除外せずに因子分析に持ち込んだ。

因子分析

主因子解で因子分析を実行し、4因子を抽出し、バリマクス回転を行った（固有値8.79、説明率41.8%）。

バリマクス回転後の各項目の因子負荷量を、因子別に記す（表5）。

1 因子の命名

抽出された因子から、絶対値0.40以上の負荷量を持った項目を抜き出し、因子の命名を行った（各項目は、因子負荷量の大きい順に並んでいる）。

・因子Ⅰ（固有値5.57、説明率26.5%）

17. 「夢に向かって努力することは大事だ」（マイナスの負荷）
20. 「夢を持つことは大事だが、それにこだわることはばかばかしい」
3. 「親が反対するならば夢もあきらめる」
5. 「この年齢になってまで夢なんて口にするのは恥ずかしい」
1. 「夢を追うことは、生活の余裕が無ければできないと思う」
16. 「夢を捨てることで初めて大人になれる」
12. 「夢の実現に向かっていてる人を羨ましく思う」（マイナスの負荷）

項目17と12に対する因子Ⅰの負荷量はマイナスであったため、文章の意味が逆になる。したがってそれぞれ「夢に向かって努力することは大事ではない」「夢の実現に向かっていてる人を羨ましいと思わない」となる。以上の内容をふまえ、因子Ⅰを「夢否定」因子と名付けた。

・因子Ⅱ（固有値1.29、説明率6.1%）

21. 「夢を見続けられるのは、特別な才能のある人だけだ」
6. 「夢にこだわりはない」
14. 「夢なんて言っている人の気が知れない」
2. 「夢のために楽しみを我慢することはない」（マイナスの負荷量）

項目2が逆の意味になる。因子Ⅱは「夢無縁」因子と名付けた。

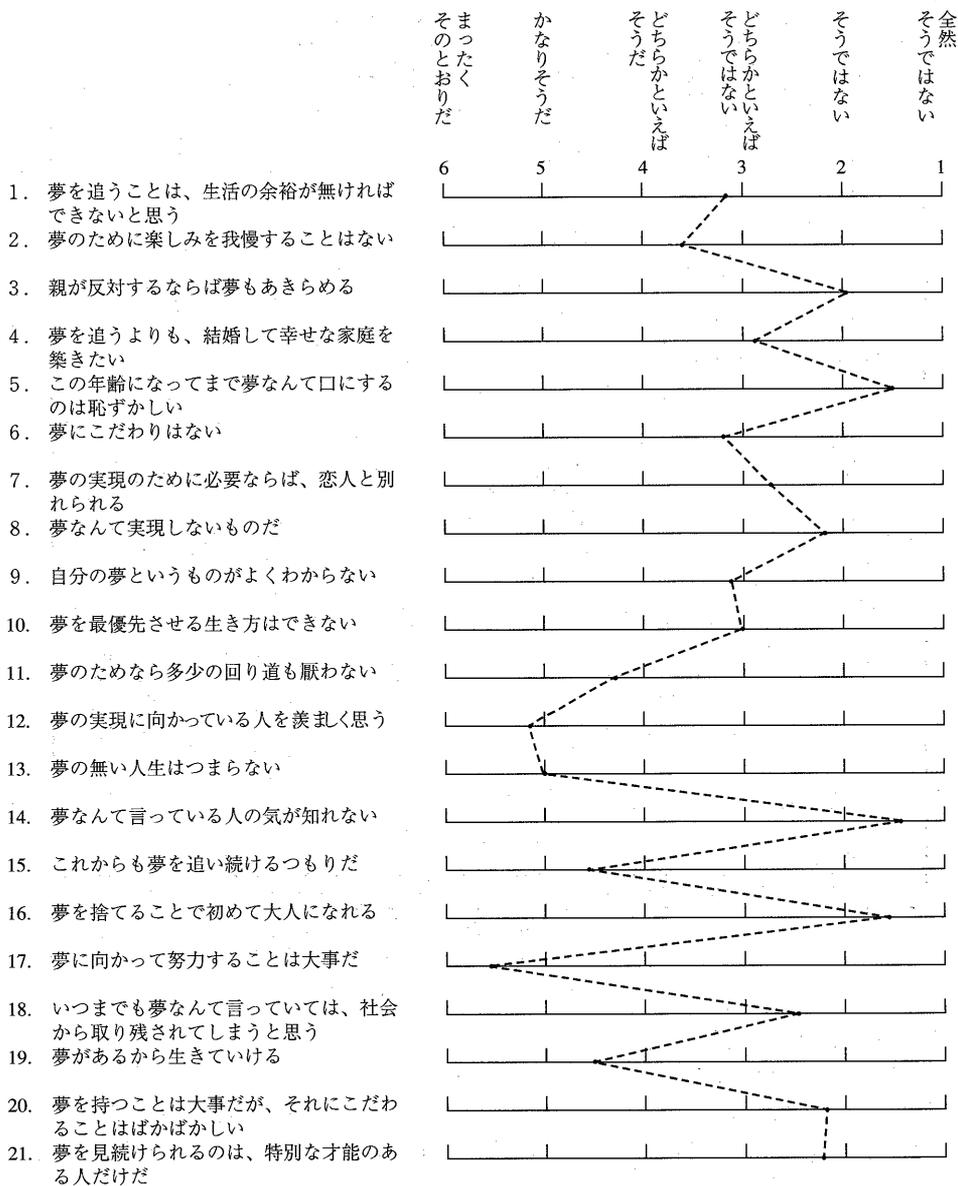


図1 各項目の平均値

・因子Ⅲ（固有値1.14、説明率5.4%）

10. 「夢を最優先させる生き方はできない」

11. 「夢のためなら多少の回り道も厭わない」（マイナスの負荷量）

4. 「夢を追うよりも、結婚して幸せな家庭を築きたい」

項目11が逆の意味になる。因子Ⅲは「夢の優先不可」因子と名付けた。

表5 バリマクス回転後の因子負荷量

項目番号	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	最終共通性
17	-0.62564				0.45389
20	0.56305				0.43348
8	0.54281	0.42906			0.49367
3	0.52872				0.36843
5	0.52161	0.32728			0.47488
1	0.51130				0.30278
16	0.47900	0.32728		-0.32683	0.44392
12	-0.43452				0.23240
18	0.33844				0.25673
21	0.30178	0.72429			0.62365
6		0.52508			0.35076
14		0.50564			0.39509
2		-0.40249			0.28491
13		-0.31638			0.21393
10			0.65208		0.52790
15			-0.63181	0.51631	0.77492
11			-0.59644		0.47387
9		0.42365	0.49994		0.45841
4			0.40219		0.28072
7			-0.34419		0.13421
19				0.83484	0.80867
説明分散	5.56569	1.28673	1.13840	0.79639	8.78721

(因子負荷量の絶対値が0.3以上の値のみ記載)

・因子Ⅳ（固有値0.80、説明率3.8%）

19. 「夢があるから生きていける」

因子Ⅳに該当した項目は以上の1項目のみ。しかし、因子4は他の項目にも影響を与えているため（例：項目15に0.516の負荷）、単独の項目名で呼ばず、「夢は生きがい」因子と名付けた。

ここで、2つの因子に絶対値0.40以上の負荷量を持った項目について見てみることにした。

8. 「夢なんて実現しないものだ」

この項目は「夢否定」因子と「夢無縁」因子両方に強く関与している。

9. 「自分の夢というものがよくわからない」

この項目は「夢無縁」因子と「夢の優先不可」因子両方に強く関与している。

15. 「これからも夢を追い続けるつもりだ」

この項目は「夢の優先不可」因子（マイナスの負荷）と「夢は生きがい」因子両方に強く関与している。

特に、単独では1項目しか該当しなかった「夢は生きがい」因子に「これからも夢を追いつづけるつもりだ」という項目が関与しているということから、命名の妥当性が裏付けられたと言えよう。

尚、7.「夢の実現のため必要ならば、恋人と別れられる」、13.「夢の無い人生はつまらない」、18.「いつまでも夢なんて言っていては、社会から取り残されてしまうと思う」の3項目は、いずれの因子に対しても、絶対値0.40以上の負荷量を持たなかった。

2 因子得点の計算

上記の抽出された4因子それぞれの因子得点を算出し、更に分析を進めた。因子得点は、言わば「対象者の因子負荷量」であり、対象者がある因子に関与している程度を表す。また、平均0、標準偏差1に標準化された値であり、「標準因子得点」と呼ばれる。

対象者は前述の自我同一性測定尺度によって、「同一性達成」「A-F中間」「権威受容」「積極的モラトリアム」「D-M中間」「同一性拡散」の各地位に分かれていたので(表6)、各群毎に因子得点の平均値を取り、1要因6水準の分散分析を行った(「権威受容」地位に該当した回答者が一人しかおらず、分散が生じないため、この地位の回答者は結果として分析から除外された)。

表6に、4因子それぞれにおける各群の平均と標準偏差を記す。

分散分析の結果、まず「夢無縁」因子において、群の効果は有意であった($F(5, 84) = 2.55, p < .05$)。次に、LSD法を用いた多重比較によると、「同一性拡散」と「D-M中間」それぞれの群の平均が「A-F中間」と「積極的モラトリアム」各群の平均よりも有意に大きかった($p < .05$)。「同一性拡散」群や「D-M中間」群の方が、「A-F中間」群や「積極的モラトリアム」群より

表6.1 「夢否定」因子標準得点

自我同一性地位	平均値	標準偏差	N
同一性達成	-0.272	1.414	9
A-F中間	0.036	0.867	11
権威受容	-0.614	0.000	1
積極的モラトリアム	-0.174	0.790	14
D-M中間	-0.038	1.083	48
同一性拡散	1.348	1.766	7
	0.028	1.160	90

表6.2 「夢無縁」因子標準得点

自我同一性地位	平均値	標準偏差	N
同一性達成	-0.139	0.570	9
A-F中間	-0.601	1.109	11
権威受容	-1.248	0.000	1
積極的モラトリアム	-0.522	0.779	14
D-M中間	0.249	1.279	48
同一性拡散	0.750	1.188	7
	0.009	1.183	90

表6.3 「夢の優先不可」因子標準得点

自我同一性地位	平均値	標準偏差	N
同一性達成	-1.037	1.382	9
A-F中間	-0.500	1.137	11
権威受容	0.206	0.000	1
積極的モラトリアム	0.170	0.825	14
D-M中間	0.083	0.919	48
同一性拡散	1.462	1.785	7
	0.022	1.181	90

表6.4 「夢は生きがい」因子標準得点

自我同一性地位	平均値	標準偏差	N
同一性達成	0.100	0.702	9
A-F中間	0.258	1.231	11
権威受容	0.150	0.000	1
積極的モラトリアム	0.331	0.865	14
D-M中間	-0.065	1.124	48
同一性拡散	-0.203	1.184	7
	0.044	1.057	90

※夢の概念の質問への回答に欠損値のあった回答者を除外したため、最終的な回答者数(=N)は、90人となっている。

も、夢は自分とは無縁だと考えていたことになる。

次に「夢の優先不可」因子では、「積極的モラトリアム」「D-M中間」「同一性拡散」の各群の平均が、「同一性達成」群の平均よりも有意に大きかった ($F(5, 84) = 4.93, p < .01$)。また、「同一性拡散」群の平均は、「A-F中間」「積極的モラトリアム」「D-M中間」の各群の平均よりも有意に大きかった。

更に、「夢否定」因子に関しても、「同一性拡散」群の平均は、他の群よりも高い傾向にあった ($F(5, 84) = 2.26, .05 < p < .10$)。

エリクソンは、青年期を、「個人が社会の中に自らの身の置き所を見出すために社会的遊びなどを通して自由に役割実験を行うことを、社会や文化が許容している時期」として位置付け、これを「制度化された心理社会的モラトリアム」と呼んだ。そして、「この期間中に『内的同一性』の永続的パターンの相対的な完成が予定される」として、青年期の同一性達成にとって必要な社会文化的条件としてのモラトリアムの意義を強調している。

一方、社会から与えられたモラトリアムを積極的に利用することもできなければ、自らの手で独自のモラトリアムを創造したり維持したりすることもできず、自我が同一性を確立する能力を一時的にせよ、絶対的にせよ失ってしまった結果として、共通に見られる病的兆候を記述し、「同一性拡散症候群」と名付けた。その病的兆候は、「親密さの問題」「時間的展望の拡散」「勤勉さの拡散」「否定的同一性の選択」などによって位置付けられる。

その病的兆候の一つに、「選択の回避と麻痺」があるが、あらゆる決定的な選択や心理社会的な自己定義を回避し、決断を保留した状態に安住しようという心理が働くという。

他の群に比べ、モラトリアムを積極的に利用することのできない同一性拡散群は、積極的な活動の原動力となり得る夢を否定しているのかもしれない。言い換えれば、現在の傾倒、また将来の自己投入の希求のために、自らを駆り立て、また活動の指針となる夢を見出せない状態を同一性拡散と呼ぶのかもしれない。

尚、「夢は生きがい」因子についての分析では群間に有意な差が見られなかった ($F(5, 84) = 0.47, p > .10$)。

参考文献

- 1) 土沼雅子・水島恵一：人間性の深層 不安と愛の人間学 創元社 1982
- 2) エリクソン E.H. 小此木啓吾 (訳)：自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 1973 (Erikson, E.H.: Psychological Issues, Identity and the Life Cycle: International University Press. 1959)
- 3) フランク V.E. 霜山徳爾 (訳)：死と愛 みすず書房 1957 (Frankl, V.E. Aertzliche Seelsorge: 6. Aufl. 1952)
- 4) フロム E. 佐野哲郎 (訳)：生きるということ 紀伊国屋書店 1977 (Fromm, E. To Have To Be?: A volume in the World Perspectives Series, planned and edited by Ruth Nanda Anshen. 1976)
- 5) 加藤厚：大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究 31 (4), 20-29 1983
- 6) 川瀬正裕・松本真理子 (編)：自分さがしの心理学 自己理解ワークブック ナカニシヤ出版 1993
- 7) 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦：アイデンティティの心理 有斐閣選書 1985
- 8) 田中敏：実践心理データ解析 問題の発想・データ処理・論文の作成 新曜社 1996
- 9) 時枝誠記・吉田精一 (編)：角川国語大辞典 角川書店 1983